

「桃花源記」を読んでショートショートをつくる試み

田 中 理 絵

一、はじめに

私は高校で教鞭を執り始めて四年目になる。勤務校では、学習者の計画的かつ主体的な学習、授業者の授業方法や学習評価方法の改善を目的とし、家庭や地域社会の情報提示の一環として、各教科がシラバスを毎年作成している。古典、現代文を教えていて常日頃思っていたことは、こうしたシラバスに則って授業を行わなければならない制約と、授業時数の関係から単に現代語訳とその説明に徹する授業しかできないということであった。

しかし、考えてみるとそのような制約だけが、そうした授業になる原因ではないであろう。古典において、「読む・聞く」ことに相対的に重点を置いたインプット式の授業を行うことに慣れてしまい、「書く・話す」場面を作つてこなかったことが大きな原因として考えられるのではないか。

普段の漢文の授業であれば、句型や語句の意味などに留意させながら、登場人物の心情やその話の要点となる部分を考

えさせることを主眼とし、最後にまとめる形で授業を行っている。その過程で、生徒に現代語訳や、登場人物の心情、話の要点について聞くことはあるが、さらに生徒自身が話の内容や表現の特徴を考えていくということまでは、なかなか授業時間内に達成することはこれまでできていなかった。

こうした現状にある自分自身の授業の在り方を見つめ直し、決められている教材、限られた授業時間内で、どのように実践ができるのか、その試みの一つとして昨年度本実践を担当していた二年生の三クラスを対象に行つた。

二、「桃花源記」を小説の萌芽として捉える

「桃花源記」は東晋の陶淵明の作であり、教科書に採録されている。^{〔1〕}話のあらすじは次のとおりである。

漁師がある時、桃の木の水の林に遭遇し、行き着いた山の穴の中にのどかな村を発見する。そこで暮らす村人たちは秦の時代の乱を避けてやって来た人々の子孫であり、外部の世界の

状況を全く知らない。その村人たちと数日間交流した後、漁師は目印を付けながら、もとの世界に帰り、言っではいけないと村人から言われていたにも拘わらず、郡の長官に村のことを報告する。郡の長官はすぐに部下を派遣し村を探させたが見つからない。また、人格の高潔な劉子驥という人物も村を探そうとするが果たせなかった。その後、村の場所を尋ねる者はいなかった。

「桃花源記」には、「桃源郷」という言葉として知られている理想郷が描かれている。その理想郷では、肥沃な土地に老若男女の平和な暮らしが営まれていた。しかし、その理想郷とは裏腹に現実世界では戦乱が絶えなかった。村人達の祖先が秦の時代の乱を避けて新たな土地にやって来た時から、東晋の時代まで絶え間なく続く戦乱。そうした現実の世界とは対照的な世界を作品の中に描くことで、現実社会を風刺していることが「桃花源記」の大きな特徴である。²⁾

生徒が一昨年度、一年生において学習した韓愈の「雑説」では、「良馬が、名馬を見分ける伯樂がいらないことで力を発揮できないこと」をたとえ話にして「能力のあるものを取り入れられない」現実を風刺していた。漢文の文章では現実社会を風刺するこうした寓話が用いられることが多いが、「桃

花源記」は、虚構の話そのものが作品となっており、寓話よりも大きな枠組みの中で風刺を行っている。³⁾

もう一つの特徴として、登場人物の心理描写の変化よりも、情景描写の詳しき、物語としての筋の面白さが際立っていることが挙げられる。現実↓異世界↑現実という、日本の「浦島太郎」(『御伽草子』)や英国の『不思議の国のアリス』といった話にも見られるように東洋、西洋を問わず、同型性を見出せる構成になっており、生徒にとって比較的馴染みやすい話であると考えられる。

「桃花源記」が書かれた東晋という時代は、「ある程度の長さの文学的描写、そしてフィクションへの自覚をとまなう小説」¹⁾が出現してくる唐代への過渡期の時代にあたる。使用している教科書においても、「小説」という單元ではなく、「文章」として柳宗元の「捕蛇者説」と並置され採録されている。「捕蛇者説」は、税の代わりに薬になる蛇を捕獲することを代々の生業としている人が、蛇の毒によって死ぬ恐怖よりも、税を取り立てられる恐怖を感じて生業を続けている状況を、柳宗元が憂えて書いた文章である。苛政が民衆を苦しめている現状を捕蛇者の挿話を通して諷刺している作品である。ということ、この「桃花源記」はあくまで現実を風刺する文

章としての括りで採録されているということであり、小説としては採録されていないということである。

しかし、唐代の小説につながる作品として「桃花源記」を捉え直した場合、今日、小説と呼ばれるものの萌芽がその特徴に見受けられるのではないだろうか。その特徴が、虚構性、情景描写の詳しさ、物語の筋としての面白さである。

そこで私は「桃花源記」を小説の萌芽となる作品として捉え、「桃花源記」の世界観、表現の特徴を生徒が実感できるための授業を組み立てることにした。具体的には、ショートショートをつくるという表現活動を通して、「桃花源記」の世界観、表現の特徴を主体的に考えさせるといふ授業計画を立てた。その授業内容について述べる前にショートショートの定義とその枠組みを使う意味について述べておきたい。

三、ショートショートの定義とショートショート の枠組みを使う意味

ショートショートとは、その名の通り短い短編小説のことである。①完全なプロット②斬新なアイデア③意外なオチが

あることを特徴としている。この枠組みに「桃花源記」における世界観、表現の特徴を当てはめることで、より「桃花源記」の世界観や表現の効果に生徒たちが意識的になれることを期待して、漢文読解とショートショート創作を融合させた授業を組み立てることにした。

「桃花源記」と同じ特徴を持ち合わせた文章を、現代語ではあるが、書くことを通じて、内容や表現の特徴が読み手に与える効果を、主体的に考えていくことができるのではないかとというのが授業の狙いである。先ほど挙げたショートショートの特徴は、「桃花源記」の特徴と重なり、単に小説を書くというより、ショートショートという、物語としてのプロットはあるが、比較的短く、風刺性をきかせた話を書くという目標を設定した方が、生徒が創作する際、「桃花源記」の特徴を作品に取り入れやすいのではないかと考えたため、小説ではなく、あえてショートショートをつくることにした。

そうした授業を構成するにあたって、まず考えたのは何を模範の作品とするかである。そこで、ショートショートといえ、星新一と言われるほど、星新一の作品は今でも圧倒的に支持されていること、星新一のショートショートには「桃

源郷」と呼ばれるショートショートがあることから、模範として星新一の「桃源郷」を設定した。¹¹ 星新一のショートショートを模範とした経緯は、初めにショートショートの文章で模範となるような文章を探している中で、「桃源郷」という話に行き当たり、「桃花源記」のストーリーとの類似性として、桃源郷が見つからなかったこと、現実社会を風刺している点が見られることから、星新一の他作品よりも模範として適当であると判断したことによる。「桃源郷」のあらすじは次のような内容である。

宇宙探索機で人類はある惑星を見つけたものの、そこは人が住めるようなところではなかった。しかし、実はそれは宇宙人が人類に侵略されないようにするための演出であったという話である。

この話は、陶淵明の「桃花源記」を意識しているとはいえないが、虚構の世界を通して、現実社会を風刺しているという点では、「桃花源記」に通じるものがある。創作させる前にこのショートショートを模範として生徒に提示しようと考えたが、生徒が創作するにあたっての影響を考慮して先に提示することは控え、あとで提示することにした。

四、授業計画

授業時間計六時間のうち、通常の読解時間に四時間をあて、ショートショート創作に二時間をあてることにした。読解の際に、ショートショート創作にあたって留意しなければならぬ、「桃花源記」の特徴である象徴性、情景描写を中心に据え、表現の特徴の読解を中心に置いた授業を行った。また、授業の中で物語の構成上の一つのパターンである現実→異世界→現実という典型的な話型についても触れた。

その他、「桃花源記」をベースにしたショートショートを書くにあたって「桃花源記」の本文読解に役立つような資料を提示するため、自作の補助教材を使用した。その補助教材のはじめに中国における「小説」の意味を、その語句が最初に見られる「莊子」(外物篇)の文章を引いて示した。¹² 次に、「鶏犬相聞」(「老子」第八十章)、「後遂無問津者」(「論語」微子篇)という典故を用いることで、表面上の意味だけでは捉えきれない二重の意味が付与されていることを説明した。さらに、寺田寅彦の「科学者と芸術家」という文章を用いて、現実と芸術の関係を押さえ、最後に陶淵明が現実世界の中で追い求めた理想郷について、「帰園田

居五首」の詩を読むことで考えさせることにした。こうした本文以外の参考資料を用いつつ、読解を深めたあと、改めて「桃花源記」の表現の特徴を班に分かれて考えさせることにした。それらを全体で共有させ、ショートショート創作にあたっての留意事項について説明した。条件として

- ①「桃花源記」の構成をベースにして書く、②「桃花源記」の特徴（授業時や班で話し合ってた意見など）を踏まえて書く、③ショートショートの定義を踏まえて書く、の三つを提示した。

以下、授業の概要を示すと表1のとおりである。

表1

次	授業内容	留意した点
第一次	○漁人が穴に入る前の場面の読解。	○幻想的な雰囲気醸し出している情景描写、桃の林について、その象徴物としての効果を説明した。 ○桃の象徴性 *漢の武帝と西王母（仙女）の話 桃・・・不老長寿、神仙のイメージ
第二次	○漁師が穴の中に入っていく、広々とした明るい土地に出る場面の読解。	○村の俯瞰的な様子や、村人の生活している様子を具体的に想像させるため、桑や竹も農民の暮らしに欠かせないものであったということを伝える。 *桑の葉・・・蚕の餌 竹・・・衣食住全てに関わるもの
第三次	○漁師が村人から歓迎される場面の読解。 ○次の時間から、ショートショートを作ることを知る。	○秦の時代の乱を避けて先祖がこの土地にやってきたという村人の台詞に注目し、秦の時代の状況やその後の時代についても、厳しい社会状況であったことに触れた。 ○「不足為外人道也」の意味するところを確認した後、似た話として「浦島太郎」を挙げさせ、現実↓異世界↓現実という物語の構造について説明した。

第四次 ○漁師が村を出た後の場面の読解。 ○補助テキストを配布し、中国における小説に對する考え方を学んだ。	○郡の長官も、高尚な士である劉子驥も村を見つけられなかったというエピソードを最後に描き、現実社会には理想郷は存在しないということを風刺していることに気付かせた。 ○補助テキストを用いて、中国の伝統的な小説における特徴を説明した。 ＊特徴 ・不思議なことを事実として記録するという傾向がある。 ・典故を用い意味を二重に持たせて、思想を表現する。
第五次 ○前回に引き続き補助テキストを用い、「鶏犬相聞」「後遂無聞津者」の典故を知り、中国における文章の特徴を押さえた。 ○現実と芸術の関係について考えた。 ○陶淵明の詩を読んだ。 ○各班四人（計十班）にわかれ、表現の特徴を話し合い、話の筋を考えた。 ○ワークシートを提出。	○現実と芸術の関係について、寺田寅彦の文章を参考にして説明した。 ○陶淵明の詩に見られる理想郷を紹介した。 ○四人で話し合いがスムーズに行えるように、今後の流れがわかるプリントを全員に、ワークシート↓資料①を各班に一枚ずつ配布した。 ○表現の特徴の話し合いが終わったところで、「桃花源記」の特徴を七つ挙げたプリントを配布した。 ↓資料②
第六次 ○前回のワークシートのまとめプリントと、ショートショートの説明のためのプリントをもとに、創作にあたっての注意事項を確認した。 ○話し合いの続き。 ○四百字詰め原稿用紙（一人二枚…下書き用と清書用）を配布。	○ワークシートの記入をまとめて、他の班の意見がわかるようにした。 ↓資料③ ○ショートショートについての説明が書かれたプリント↓資料④を配布し、ショートショートについての共通理解をもたせた。 ○注意事項として次の三つを意識させた。 ・「桃花源記」の内容をベースにして書く。 ・表現の特徴（各班で考えたこと）を参考にして書く。 ・ショートショートの定義を意識して書く。

第六次では作品が仕上がらなかったもので、課題にして後日提出させることにした。十班全ての作品が出そろったあと、全班の作品を読み合い、条件を満たしているかをもとに評価させた。その後、星新一の「桃源郷」を配布した。

五、生徒の作品分析

字数の都合上、生徒の全作品をここで掲載することはできないが、評価の高かった二作品をもとに、分析していきたい。

(1) 少女森に迷う

この作品はそのタイトル通り、夏、祖母の一周忌に実家に帰省した少女が森に迷う場面から始まる。季節はずれの桃の花に誘われて、一面桃の木の森の奥に入っていくと白いワンピースを着た少女が立っていた。はじめはその少女を不審に思いつつも、打ち解けていく。暗くなってきた謎の少女に急かされるようにして、帰ろうとしていたとき、少女から長い黒髪に付けられていた髪飾りを受け取る。急いで帰ろうとして飛び込むようにして光のある方向に向かっていくと、いつの間にか和室に移動していた。和室にある祖母の遺影を見る

と、さつき別れた少女からもらった髪飾りを付けた祖母が微笑んでいた。そのあと、何度探してもあの桃園は見つからなかった。

次に、急に和室に移動していた場面を引用し、その特徴を見ていきたい。

「これ・・・」

それはあの場所で受け取った髪飾りだった。桃の花を象った髪飾りが光を受けながら掌の上で転がっている。

「・・・夢じゃなかったんだ・・・」

でも一つだけ、心に引つかかっていることがある。彼女は一体誰だったのか。

(・・・もう、わかることもないのに・・・)

少し自嘲気味に笑みがこぼれる。ふと目線をあげる。視界に入ってきたのは・・・

「・・・え？」

そこにあつたのはおばあちゃんの遺影だった。一周忌なのだから遺影があるのは問題ない。問題なのはそこに写っているそれだった。私の手の中にある髪飾りと全く同じものを付けているおばあちゃんが微笑んでいる。

（・・・なんで・・・これが・・・まさか・・・！）

気付いたら私は裏の森へとかけ出していた。あの桃園を探したくて、真相を確かめたくて。でも何周しても桃園は見つからなかった。

・・・夏の夢物語だったのかもしれない。だけどこの髪飾りが手の中にある限りそれは夢なんかじゃなくて、まざれもない現実なんだ。夏の空に、桃の花びらが舞っていたような気がした。

単なる髪飾りではなく、「桃の花を象った髪飾り」であることから、迷い込んだ森で出会った少女を象徴させるようなものを取り入れようと意識していることがわかる。結末として謎の少女が昔の祖母であることが暗示されており、ショートショートをつくるうえで提示していた要素として挙げていた、意外な結末をつくることもある程度は考えてストーリーリ構成をしたことがうかがえる作品に仕上がっている。

全体としてみても、現実の世界から、現実と非現実が混合したような世界へと少女が迷い込み、最後に現実に戻ってきたが、再び異世界に戻ることはできないという、「桃花源記」における現実↓異世界↓現実という物語の構造を踏まえた構

成になっている。また、先ほど指摘した「桃の髪飾り」という、謎の少女が昔の祖母であることを示す象徴物を使用しているだけでなく、桃の木の影から見える白いワンピースといった色彩表現によって情景を効果的に表現している部分も見られる。これらは、意識的に「桃花源記」の特徴を踏まえて書こうとした結果であり、創作前に掲げた条件をかなり満たしているといえるが、風刺性という要素があればなおよかった。

（２）病室

何本も管がつけられた状態で生まれたときから病室にいる少女。少女は管を自分で取り、死のうとするがすぐに止められてしまう。そんな中、ある時少女は部屋の中の異変に気付く。昨日まで真っ白だった壁がなくなり、大きな窓ができたのだ。その窓からは心地良い風が吹き込んでくる。はじめて見る窓の外の風景。少女はその夜、鳥になって大空を飛んでいる夢を見た。目覚めると、窓の外で本当に鳥が大空を羽ばたいていた。その日から、少女は窓の外を見ることが楽しくなり、窓の外で人々が楽しそうにしているのを見ると、外へ出たいという願いは募るばかりであった。そんな中、彼女の薬や注射、管の数は減っていった。とうとう 管がはずれ、

少女は自らの足で立ち、病室の扉を開けて外に出て行く。すると、そこに広がっていたのは少女が夢見ていた世界とは違う現実の世界であった。

この話の結末を引用しておく。

少女は哑然としている。空気は淀み、人々はうつろな目をして戸惑うことなく他人を 傷つけて生きている。立ち止まって空を見上げる人などいない。もう、少女の前には外の世界と隔てるあの大きな窓はない。しかし、少女は死んでいない。この世界で生きていくのだ。

「病室」という作品に対して生徒がコメントで「オチがとても風刺的だと思いました」「プロットがしっかりしていて、読みやすかった。先が気になる始まり方で、オチにも風刺性があつてよかった」と述べているように、この「病室」という作品は、風刺性を取り入れることに成功している。少女が病室で夢見た現実世界は窓から見えたものとは異なり、淀んでいた。窓から見えていた景色は少女が作り出した幻想であつたのかもしれない。窓の外に繰り広げられていた楽しそうな人々の様子とは対照的なうつろな目を

した人々の様子。その対照性から、現実社会の忙しさや、厳しさから自分を守ることに精一杯で、他人を平気で傷つけるような現代社会の人々の姿が浮かび上がってくる。

こうした風刺性以外にも、いくつかの特徴がうかがえる。まず、「桃花源記」の場合は、戦乱のない平和な世の中に漁師が実際に迷い込んでいたが、「病室」では少女の病室の窓から人々が楽しそうにしている様子が見えるという設定にするという工夫が見られる。また、桃の木の華やかさが人々の楽しい日常をよりいっそう引き立てる効果を發揮しており、意識的に情景描写に「桃花源記」の要素を取り入れようとしていることがわかる。「病室」は、創作前に提示しておいた全ての条件を満たしており、完成度が高い作品である。

六、生徒の感想から見てくる課題

授業終了後、この授業内容に関する感想を書かせたので、一部抜粋して紹介したい。

・ ショートショートを書いて、漢文の知識が深まった
とは思いますが、作者は楽しんで「桃花源記」を

書いたのだと思います。なぜなら自分が書いていて楽しかったからです。

この感想からは、書くという行為を通じて作者の心中を思いうやるといふ視点が見られる。作者がどのような心情で書いたのかはともかくとして、漢文に書くことを導入することは、漢文に対して興味、関心を湧かせる一つの方法として有効であったことがわかる。しかし、漢文の知識の深まりについては感じられなかったようだ。

・クラスのみんなの作品を読んで、どれも上手だなと思いました。こんな風に自分の書いたものを人に見てもらうのはほとんどないので、書いていて楽しかったです。それから、星新一さんの作品に再びはまってしまいました。星さんの「桃源郷」は昔読んで、微かに覚えていたのでやはり話の展開が上手だなと思いました。

自分が書いたものを人に見てもらう経験は現代文ではあっても、これまでの私の古典の授業では皆無に近い状態だった。

こうした読み合う経験は、生徒の古典学習に対する意欲にもつながっていくのではないだろうか。

・プロットを組んで無理なくオチのあるストーリーを作るのは難しかった。「桃花源記」にクオリティーの高い表現技法が使われていてすごいと思った。星新一さんのクオリティーがすごいと思った。

無理なくオチのあるストーリーを作ることの難しさは、授業中にほとんどの班が作品を仕上げられなかったことからすでに感じられていた。結果として、無理やりオチを作ろうとすることに気を取られ、「桃花源記」の特徴を踏まえることを忘れていた作品が見られた。自分が苦戦した分、どれだけ「桃花源記」や「桃源郷」の作品としての出来がすばらしいかを実感したのだろう。

・「桃花源記」の特徴をうまく取り入れるのが難しかった。一六〇〇字はつらい。

この感想も、先ほどの感想と同じく創作の難しさを述べて

いる。この生徒の場合、字数制限があることで、書く内容に制限がかかってしまったのかもしれない。字数制限がなければもっと自由に書くことができ、創作の幅を広められた可能性はある。

・今回の授業を通じて感じたことは、授業で普通に「桃花源記」について学習しても気付かなかった物語の深さが、シヨートシヨートを通じて分かったということです。「桃花源記」を最初に読んだ時は、風景描写が多いことや、五感が使われていることに気付かなかつたけれど、今回の授業を通じてこれらのことがよく分かりました。

物語の深さをシヨートシヨートを通じて学ぶ事が出来た、というこの授業の狙いが達成されたと思える感想である。読むだけではわからなかったことが、書くことを通してわかってくる。表現に着目し、表現を味わうためには、自身が表現者になることが、その一助になることを示唆している。

次の章で、このような生徒の感想を踏まえて、今後の課題を挙げておきたい。

七、おわりに

今回の実践を通して感じたことは、当たり前のことかもしれないが、生徒は主体的に活動しているときが一番活き活きとしているということである。普段の授業においても、漢文に難しさを感じつつも意欲的に取り組んでいる生徒たちの様子が見られるが、今回は自分たちが創作者となって作品をつくるということで、普段の授業では見られない表情で楽しく授業に臨んでいる生徒が多かった。しかし、今回の授業の狙いはただ楽しくシヨートシヨートをつくることだけにあつたのではない。シヨートシヨートをつくる過程において「桃花源記」の表現の特徴をつかみ、読みを深めること、こちらの方が本来の狙いであつた。その狙いを踏まえて、今回の実践では、全体の内容を把握する読みの時間において表現に着目しながら読むように心がけて授業を行った。たとえば、桃に見られる象徴性の話や、話の構造の話など、普段ならあまり詳しく論じない点に着目させながら読み進めていった。そうした読みの授業が、書く上で漢文の表現を意識することにつながっていた部分もあつたが、生徒自身に表現上の工夫を指摘させたり、疑問をもたせたりするということにそれほど時

間をかけられず、授業者が提示することが多かったため、生徒が主体的に考える時間を結果的にもてなかった。そのことが、実践の狙いである漢文の読みの深まりにつながっていかなかった原因の一つだと考えられる。

二つ目の課題は、シヨートシヨートを讀んだ後、再び漢文に戻って、その表現を味わうことのできる働きかけができなかったことである。この授業実践で生徒同士は、作品を読み合い刺激を受けたたようだが、それを漢文の読みの深まりにまで発展させるためには、「桃花源記」のどういう特徴が取り入れられてどういう効果を生み出しているのか、逆に「桃花源記」のどういう特徴が取り入れられていないこととどのような効果がなくなっているかなど、お互いの作品の長所、短所を、「桃花源記」の特徴を振り返る中で、批評し合うことが必要であった。

つまり、この実践での課題は、読む時間に漢文から導き出される表現の特徴を生徒の主体性から引き出すことと、シヨートシヨートを書いた後の批評を、再び漢文の表現を確認しながら行い、表現が読みにどう影響してくるかを分析することである。さらに言うならば、陶淵明がこの作品に込めた深刻な社会状況に対する視点を掘り下げて伝え、考えさせた方

が読みは深まっていくはずである。

こうした課題を踏まえて、今後も継続してこのような取り組みを続け、現代語訳をすることだけに満足せず、生徒の生き活きとした「読む・書く・話す・聞く」という活動につながるような授業を試みていきたい。

(注)

(1) 授業で使用したのは「精選古典 改訂版」(大修館書店、二〇一三年)である。

(2) 一海知義「陶淵明—虚構の詩人」(岩波書店、一九九七年)

空想物語というものは、日本の斬がそうであるように、「むかしむかし、ある所に……」といったきまり文句ではじまるのがふつうである。ところが「桃花源記」は、時間は「むかしむかし」でなく「晋の太元中」、場所は「ある所」ではなく「武陵」。そしてその時間も空間も、淵明自身が生きていた身近な世界のことである。

このことは、物語が現実批判、現実諷刺のトゲを内に秘めていることを暗示する。

(3) 川合康三氏は「桃源郷 中国の楽園思想」(講談社、二〇一三年)において、「桃花源記」と志怪小説との最も大きな相違を「桃花源記」にはこの世ではありえない事柄が書かれていないことである」として次のように述べている。

確かに不思議な世界ではある。しかしよく見直してみれば、すべてが合理的に説明できる範囲に収まっている。村人たちは秦の時からその地にこもった人々であって、ふつうの人間

であった。そして漁師を質問攻めにするなど、極めて人間らしい。ふつう異界の人間は自分たちが異界の人間であると自覚しているもので、現世の人間に対して興味をいだいたりしない。

漁師は桃林に逢着すると志怪の登場人物と同じく「之を異」としたのではあるけれど、この桃林も必ずしも現実にありえないものではない。数百歩の間、兩岸に桃の木だけが並ぶというのは、超自然の光景ではない。

この川合氏の指摘から、虚構でありながら現実性をもっている「桃花源記」の特徴をみる事ができる。

(4) 興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九一年)の第六章金文京氏による小説の概説参照。

(5) 使用した『精選古典 改訂版』では、小説教材として晋の干宝「定伯売鬼」、唐の李復言「定婚店」、唐の李景亮「人虎伝」を採録している。「定伯売鬼」は、幽霊が人間に売られてしまう話であり、志怪小説の一つに数えられる。「定婚店」は、冥界の役人である月下老人の予言どおり赤い糸で足を結ばれていた女と男が結婚する話であり、「人虎伝」は中島敦「山月記」のもとになった話である。この二作品は、伝奇小説と呼ばれるものである。

これらの文章は、実際には起こりえないことを、虚構としていかにも現実であり得そうに描いているという点、興味をそそるようなストーリー展開が見られる点から高校の小説教材に採られていると考えられる。

(6) この定義は高井信『ショートショートの世界』(集英社、二〇〇五年)に拠った。

(7) 星新一の「桃源郷」は、『ようこそ地球さん』(新潮社、

二〇一二年)に収録されている。

(8) 夫揭竿累、趨灌漑、守鰓鮒、其於得大魚難矣。飾小説以干県令、其於大達亦遠矣。

夫れ竿累を掲げ、灌漑に趨き、鰓鮒を守るは、其の大魚を得るに於けるや難し。小説を飾りて以て県令に干むるは、其の大達に於けるや亦た遠し。(「莊子」外物篇)

(9) 小国寡民。使有什伯人之器而不用、使民重死而不遠徙。雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之。使民復結繩而用之。甘其食、美其服、安其居、樂其俗。隣國相望、雞犬之聲相聞、民至老死、不相往來。

國を小さくし民を寡なくす。什伯人の器有るも而も用ゐざらしめ、民をして死を重んじて徙るより遠ざからしむ。舟輿有り而も雖も、之に乗る所無く、甲兵有り而も雖も、之を陳ぬる所無し。民をして復た繩を結びて之を用ゐしむ。

其の食を甘しとし、其の服を美しとし、其の居に安んじ、其の俗を樂しとす。隣國相望み、雞犬の聲相聞こゆるも、民は老死に至るまで、相往來せず。(「老子」第八十章)

(10) 長沮桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。長沮曰、夫執輿者為誰。子路曰、為孔丘。曰、是魯孔丘与。對曰、是也。曰、是知津矣。問於桀溺。桀溺曰、子為誰。曰、為仲由。曰、是魯孔丘之徒與。對曰、然。曰、滔滔者、天下皆是也。而誰以易之。且而與其從避人之士也、豈若從避世之士哉。耰而不輟。子路以告。夫子憮然曰、鳥獸不可與同群。吾非斯人之徒與而誰與。天下有道、丘不與易也。

長沮・桀溺、耦して耕す。孔子之を過ぐ。子路をして津を問はしむ。長沮曰はく、「夫の輿を執る者は誰と為す。」と。子路曰はく、

「孔丘と為す。」と。(長沮) 曰はく、「是れ魯の孔丘か。」と。対へて曰はく、「是れなり。」と。曰はく、「是れなれば津を知らん。」と。桀溺に問ふ。桀溺曰はく、「子は誰とか為す。」と。曰はく、「仲由と為す。」と。曰はく、「是れ魯の孔丘の徒か。」と。對えて曰はく、「然り。」と。曰はく、「滔滔たる者、天下皆な是れなり。而して誰か以て之を易えん。且つ而其の人(諸侯)を避くるの士に従はんよりは、豈に世を辟くるの士に従ふに若かんや。」と。擾して輟まず。子路以て(孔子に)告す。夫子慨然として曰はく、「鳥獸は与に群を同じくすべからず。吾斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にかせん。天下道あらば、丘は与に易えざるなり。」と。

(11) 『寺田寅彦隨筆集第一卷』(岩波書店、二〇一三年)

ある人は科学をもつて現実に即したものと考え、芸術の大部分は想像あるいは理想に關したものと考え、かもしれないが、この區別はあまり明白なものではない。広い意味における仮説なしには科学は成立し得ないと同様に、厳密な意味で現実を離れた想像は不可能であろう。科学者の組み立てた科学的系統は畢竟するに人間の頭腦の中に築き上げ造り出した建築物制作品であつて、現実その物でない事は哲學者をまたすとも明白なことである。また一方において芸術家の製作物はいかに空想的のものでもある意味において皆現実の表現であつて天然の法則の記述でなければならぬ。俗に絵ぞら事という言葉があるが、立派な科学の中にも詮索すれば絵ぞら事は数えきれぬほどある。科学の理論に用いらるる方便仮説が現実と精密に一致しなくてもさしつかへがないならば、いわゆる絵ぞら事も少しも虚偽ではない。分子の集團から成る物体を連続体と考へてこれに微分方程式を応用するのが不思議でなければ、色の斑点を羅列して物象を表わす事も少しも不都合

ではない。

(12)

帰園田居五首

其一

少無適俗韻
性本愛邱山
誤落塵網中
一去十三年
羈鳥恋旧林
池魚思故淵
開荒南野際
守拙歸園田
方宅十余畝
草屋八九軒
榆柳蔭後簷
桃李羅堂前
曖曖遠人村
依依墟里煙
狗吠深巷中
雞鳴桑樹顛
戶庭無塵雜
虛室有余閑
久在樊籠裏
復得返自然

園田の居に帰る 五首

其の一

少きより俗に適ふの韻べなく
性本 邱山を愛せしに
誤つて塵網の中に落ち
一たび去りてより十三年
羈の鳥は旧の林を恋ひ
池の魚は故の淵を思ふ
荒を南野の際に開かんと
拙を守つて園田に帰る
方宅 十余畝
草屋 八九軒
榆柳 後簷を蔭ひ
桃李 堂前に羅なる
曖曖たり 遠人の村
依依たり 墟里の煙
狗は吠ゆ 深巷の中
鶏は鳴く 桑樹の顛
戸庭 塵雜無く
虚室 余閑有り
久しく樊籠の裏に在りしも
復た自然に返るを得たり

この詩は陶淵明が最後の官職である彭澤県の県令を辞めてほどなく作ったといわれる詩である。後世の人々から「園田詩人」と称されるようになる陶淵明は四十一歳にしてようやく故郷の自然に囲まれながらのんびりとした生活を送れるようになる。

詩の句には、慣れない役人生活を辞めて、故郷の家に帰り、伸び伸びとした生活を送れるようになったことを喜ぶ陶淵明の心がよく表れている。この詩を通して、陶淵明が理想とした生活の一端をうかがうことができる。詩に描かれている期待に満ちた生活には、「桃花源記」の中に描かれている、鶏や犬の鳴き声のどこかに聞こえてくるような村の様子との共通性が見出され、詩の中の世界と「桃花源記」における世界とが共鳴している。よって、この詩を、陶淵明の理想郷を考える上での参考資料として提示した。

(13) 武帝と西王母の話は『漢武故事』に載っている。

地上に降りてきた西王母に不老長寿の薬を求める漢の武帝に対して欲心が多いのでまだあげられないと言い、西王母は桃を渡す。

桃を七つ取ってよこし、王母が自ら二個食べ、帝に五個与えた。帝はその種子を取っておき、自身の前に置いた。王母が「これを何に使うのですか」と尋ねると、帝は「頂いた桃がおいしかったものですから、植えようとぞんじまして」と答えた。すると王母は笑って「この桃は三千年に一度実をつけるので、下界では植えるものではありませんぬ」と言った。

(竹田晃、黒田真美子編『中国古典小説選1 漢・魏』(明治書院、二〇〇七年)

(大阪府立大手前高校教諭)

資料①

「桃花源記」を読みショートショートをつくる

班

メンバー・・・

○陶淵明先生の優れている表現とその理由をグループで考える。(三つ以上)

○4Wを決定する。

いつ

どこで

誰が

何をする

○プロット(物語・ストーリーの前後関係・因果関係をハッキリ示したもの)を考える。
箱書きをつくる。

場所・時間・登場人物・出来事・主な台詞を書いてつなげ、無駄な場面はカットしたり、前後のつながりによって場面を加えたりする。
箱書きを順番に貼る。

○起承転結の分担

起

承

転

結

「桃花源記」から学ぶ小説作法七箇条

一、5W1Hの設定

When (何を) Where (どこで) Who (誰が) What (何を)

晋太元中、武陵人捕魚為業。

・なぜ実在の時代・地名を使ったのか。

↓物語に現実性をもたせるため。

二、象徴物を使う

忽逢桃花林。

・桃の花が咲く林が象徴するのは。

↓神仙の世界（異世界）を彷彿とさせる。

三、感覚器官（五感）に訴える描写（ものの動きを書いて心の動きを伝える）

芳草鲜美、落英繽紛。

・この描写にはどのような感覚が使われているか。

↓視覚。嗅覚。（聴覚）。視覚に頼りすぎない。

四、小説を語る方法

・「桃花源記」は何人称の小説でしょう。

↓三人称。（語り手がいかなる作中人物を指しても「私」と言うことがない。）

それに対して「一人称」小説とは語り手が作中人物を指して

「私」と言いうる。

五、地の文と会話文のバランス

・印象的な台詞をあげてみよう。

↓村人の台詞を最小限にすることで意外性、緊張感をもたせる。

六、結び方

第四段落

・何を暗に伝えようとしているのか。

↓俗世間的な人物も、高尚な人物も桃源郷にはたどり着けないことから、どこにも今のところ桃源郷はないということ。

七、風刺性

先世避秦時乱、率妻子邑人、来此絶境、不復出焉。

・何を風刺しているのか。

↓戦乱に明け暮れる悲惨な現実。

陶淵明先生の優れている表現とその理由

○晋太元中、武陵人捕魚為業。

実際の年号や地名が描かれているのでリアリティが感じられる。

○情景描写が多い。情景描写が細かい。

・ 髣髴若有光

夢見心地な雰囲気を出している。

・ 芳草鲜美、落英繽紛

美しい様子を四字熟語で表している。

おとぎ話の世界に引き入れてくれる。

・ 初極狹、纔通人

日常とはかけ離れた所を想像させる。

○心理描写が少なめ（漢文全体としてだが。）

○登場人物が少なくて分かりやすい。

○二字熟語の多用。四文字で区切れている。

リズムミカル。リズムが良い。

○典故が自然に用いられている。

○黄髮垂髫、並怡然自樂。

老人と幼児を表している。

想像力が広がるように色で年齢を表現。

黄髮だけで老人だとわかるのがすごい。

幸せそう（うらやましい）と思わせる描き方。

○後遂無間津者

諦めたのか？桃源郷を知っている人がいなくなったのか？最後が意味ありげに終わっている。

曖昧なまま物語を終わらせることで読者のイメージを膨らませる。

資料④

ショートショートとは

ショートショート・ストーリーの略。次の三つの要素を重視して原稿用紙約二十枚以下で描かれた小説。

- ①完全なプロット
- ②新鮮なアイデア
- ③意外な結末（オチ）または奇妙な余韻を残す結末（オチ）

ショートショートにはSFやミステリ、さらに様々な小説のジャンルも含まれる。

「ショートショートの書き方」

○アイデアの発生法

- ・「もし〜だったら」と考えてみる。
- ・日常生活で抱いた違和感を膨らませる。
- ・異質なものを組み合わせる。

○オチにつながる伏線（作家の頭の中にある裏の世界を時折垣間見せるような描写）を、なるべく自然に読者に気付かれないように挿入する。

○ショートショートの意外な結末（オチ）のタブー

「実は夢だった」「実は宇宙人だった」「実はロボットだった」「実は妄想だった」「実は神様だった」「実はバーチャル空間での出来事だった」など。これらはプロット・アイデアが練られていなくても形にはなるが、面白みを出しにくい。

（高井信『ショートショートの世界』集英社、二〇〇五年）